金屋金五郎後日雛形

太夫直之正本

地所千代までおはしませ。我等も千秋さふらふ。鶴と龜との齡にて。フシ幸ひ心に任せたり。地千早振る神のみことの昔より久し。かれとぞ祝ひけり。そよやりいちやとんどや地凡そ千年の鶴は萬歳樂と謠うたり。又萬代の池の龜は甲に三極を戴いたり。フシ瀧の水。地色冷々と落ちて。夜の月鮮かに浮んだり。渚の砂。索々と散つて朝の日の色をあふす。天下太平國土安穩。五穀成就君民豐かに治る御代。千代に八千代に小石の。巖となりて苔のむす迄〳〵。皆同音に和歌をあげ。主に禮儀正しくも座敷を立てば今一つ。御酒あげ度いと縋り付く。イロモウ御免と手を合せ。さらば〳〵と歸る宿あらおもし。ろの三重へ浮世かなフシ實に色里に。靡き合ふ二葉の松の夕時雨。フシ濡れにぞ濡れし戀の山。地色情の峠踏み分けて假に逢ふ夜の私語。誰れ善し惡しも何時しかに誠と成りて今はやや。一歳餘りの身の代を身請と名附け根引草勤の際を曙屋大次郎といふ優し男の。地手に入れ初むるお家なり。額の小さんと言はれしも昨日と暮れて今日は結ふ。髪の鬆無し引替へて笄髷の一つ櫛。スエテ引手も今は主一人。田面の雁の假初に。二世の契を結ぶ夜の五日歸りを昨日といふ。今宵の月を差向ひ二人が中に盃と。銚子なほして手づからの。酌とりどりの物語。詞何と思やる南嶋の勤心と斯う成つて。氣儘に暮す浮世風迎鶴なし借りましよを。聞かずに暮す身と成るもそちが仕掛に浮れ船。地色粹だけ身だけうち込んで。小さんを替へておさんよと。言はする人の違うたを嘸本意なくも思ふらめ。詞なれども身爲惡しからねば。草葉の蔭なる金五郎。嘸滿足に思はれん。今頃なんど世帶して斯うした月を見ることは。下手な佛も知り給はじ。よその始末に氣を配り次第〳〵に富み榮え。老先までもこの手をば斯う取交し寺詣り。後生の庭の砂まで妹背語らふ習ぞと。縋れかゝれば何となく。地色小さんは少し羞る態尤も近所に人なけれど。空冴え渡る月の顏嘸厭らしく思されん。言はんす如く誠ある。緣に惹かれてアノ廓の苦患を逃れ方樣と一期連添ふ友千鳥。羽交重ねの幾夜かも。見捨てられぬを一筋にかねゞ〳〵頼む愛染樣。さては氏神生玉の明神樣を誓に立て。地世帶姿と

成るからは其お詞は管ぞかし。地何處やら勃に逢ふ樣に又してはひぞらんす。モウやめさんせと言ひければ。詞大次郎聞きかため。我を咎むるそちがいふ其ひぞるとやらいふ事は。類と綿屋で地いうたこと未だ忘れぬかと咎められ。ハツト面に紅葉してコハヤモウわしが言ひ誤り。そんなら一つ酒飲んで夢結ばんと差しければ。モ一つ飲んでと突き戻す。さしめのあひと注ぎければ。詞それ又さしめといふ詞勤の土が離れぬと。地言はれて小さんア、羞かしモウ許さんせと立ちけるをそりや手が悪い寢させじと。續いて追ひかけ抱き留め。詞これ申しお女郎。地一寸借り度い〳〵といふに嬉しや借りましよは。詞色里の禁句にて客と花車とがいふ詞。地未來をかけて添ふわしに誰に恐れて借りどころアヽ、フシ可笑しやと言ひければ 色詞是は拙者が誤りすがた。なれども酒に後を見せ。逃げては物がないといふ。地それ〳〵誤り姿といひ。酒に後もさをゝ(本ノマヽ)の詞。嬉しや互の言ひ誤り差引なしに濟ましました。モウお休みと夕月も。雲にかくるゝあれ〳〵と顏と顏とに物言はせ。手を取り膝に打凭れ。詞今宵は少し聞くことあり。そちと金五郎挨拶の。深いがかうじて心中の。有たけ仕舞うて打止に二人が姿繪に畫かせ。地夫の方には女の繪。女の方には男の繪。取交しつゝ逢はぬ夜の樂しみなどとの噂あり。地色苦しからずば其繪をばそと見せられよとありければ。小さんおろ〳〵涙聲忘れて年を經しものを。思ひも寄らぬ御尋ね尤もさうした言の葉の。フシありしは昔物語。地色今かゝる身となるからは隱すは愚痴よ打開けて。語る事なし相手なし末を樂しむ主樣に。何か包まん是々とオクリ前よりへ出し床の間に。掛けて二日と見もやらずしを。しをとして居たりけり。地色大次郎掛物の繪をつく〴〵と打眺め。詞遁れ美事金五郎が姿斯く迄似るものか。面體身振眼の働き。地鼻筋の高き屋に登る女は誰やらと。少しはねする詞かや世に亡き人の繪を見てさへ。むつとするのはそちが事。思ふが故の私語。サア酒飲んで寢まいかと。搖り起されし手を取て 詞ウヨウこのいで悪謔な鼻の高いに登るとは 餘りきつい御詞重ねて言ふか言ふまいかと。散々に打擲せられ。モウふつつりと言ふまいに。拜む〳〵と手を合し是を合圖に床の内。煙草引寄せ吸付けて思ひの煙吹くよと見えしが。不思議や床に掛け置きし。金五郎が面影の己れと動き消ゆると思へば。忽ち魂魄々と現れ。小さんが飲みし煙草の。地煙に紛れ入りけるは 三重凄じかりける 裏へ憂しや思ひを忘れんと思ふ心こそ忘れぬよ

りはナホス思ひあり。地色さるにても身はあだし野の露霜と。消えて返らぬ玉の緒の戀といふ字に繋がれて。是非も金屋の金五郎が。其亡き魂にてありけるなり。誠に世にある其時は役者仲間の嘲りと。又色里の騷ぎにも歌淨瑠璃に作られて。フシ浮名の額にかゝりしも。地色元より深き戀草の繁り逢ふ夜の一言を。仇になさじと思ひ詰め冱寒の冬の寒き夜も。そちを思へば徒歩跣其寒風に誘はれて遂に逝く。道とは豫て聞きしかど。昨日。今日とも今宵とも。思はざりつる。死出の道。是よりあなたの供とてはオクリ血脈。一つに數珠一連。助け給へと繰捨つる。袂の露の數取りも。暫しか程は請けしかど。歌淺き緣の。習ひとは言ひながら。また。捨て。られし葛の葉の。若葉に染むる色の黄にうつり變れる恨めしや。恨みても盡きぬは是見よ御事が爪。血文血判の誓紙の數髮さへ三度切る小指。フシ守袋に掛けまくも。冥途の土產今は仇。起請は烏髮は劍の山に登れば。ハヤメ血文は忽ち猛火盛に燃えあがる。炎の烟むせ返る フシ此苦しみは如何ばかり。かゝる誓を餘所になし二張の弓を彎かんとは。さて淺ましや。腹立ちと。枕屏風にすつくりと立居苦しき 本調子ナホス 姿なり。地色小さんはは つと起き直りナウ懐しの御姿。歌わしはこなんに殘されて。髮も容姿もいらばこそ。姿を墨と思へども。地一人の母に諫められ可笑からざる身の勤。此御方の情にて萬の引目借錢や。否と言はれぬ年の内。親方任せといふことは方樣も御存じよ。心は立つて居ますれど姿縋るゝ藤葛。離れ難なき仔細にて斯樣には成り候へども。在りし昔の戀草は。夢現にも見もやらじ。此世を去つて極樂の佛の會座にありながら。はかなき戀に輪廻を遺し。未來は如何思さずやと涙を流し申すにぞ。地色ア、愚なり〳〵。とても佛の緣の綱。切れて野飼の畜生道に。墮つるを厭ふ心なら。再び此處に來らんや伏屋に殘す園原や。あるにもあらぬ我思ひ亂れ心の亂れ髮。地共に行かんと言ふ聲に。大次郎目を覺し。側なる妻添へ押取つて。ヲ何者なれば夫ある女を捕へとやかくと。非道の振舞堪忍ならず。地色そこ離さぬかと詰掛くれど。姿はなくて聲ばかり。ヲヲ、尤もなりさりながら。戀程せつなきものはなし。御身の情も我戀も同じ憂身と知りながら。地我黄泉の旅迄も忘られぬ世の思ひもの。遺して獨り行空の。空定めなき村時雨。誘はれ靡く常世草。見るもなか〳〵腹立や。思ひ切るせを聞かまほし。如何に〳〵と罵れば。ヲ大次郎事ともせずム、扨は金屋の金五郎が其一念にてありけるか。尤も命なりけ

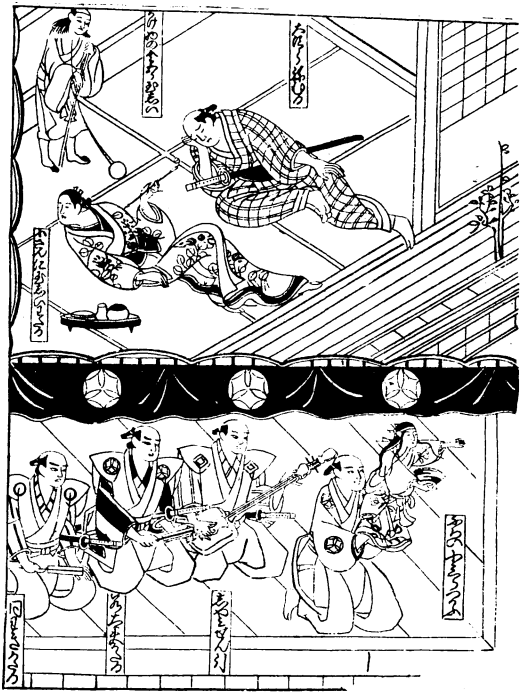
る時。小さんと深き思ひ川淵瀬に變る世の習。先立ち給ふ故にこそわれ此女を迎ひ取れ。戀慕の絆切れ果てゝ。世になき身にも愛着の。念を殘すは愚痴ぞかし。地臨終の一念にも彌陀を忘れて女が事。思ふが故に迷ひ來る。志こそ哀れなり。とく〳〵去つて成佛あれ。地南無幽靈頓生菩提。浮み給へと手を合す。否とよ佛にならんにこそ。其勸めをも聞くべけれ。既に邪道にをちこちの浮む世更になき身をば地誰に厭はじ糸薄穂に現れし此上は。何といふとも連行かん。早とく來れと結髪を。手にくる〳〵と纏はれて。小さんはわつと聲をあげ。ナウ情なし金五郎殿其古へはこなた故。よしなき名をも立てしかど。そこを厭はで運びたる身には如何なる恨みあり今斯く辛い御仕方つれなしつらし情なし。行かで叶はぬ道ならば行くまじきにあらねども。暫く爰を緩めてたべ否や放さじと引立つるやらしと大次郎小さんをば。抱きとむれど妄執の其念力の强くして。引いつ引かるゝ煩惱の絆も切れよ切るまじと。あなたへ引けばこなたへ引く。□□□(行李)ば大次郎取はづし。おのれ。奈落の底迄も。追付け追かけ取返さでは置くべきかと。聲をしるべに追うて行く。フシいづれ名に立つ色所小峰に水の戀港寄る邊定めぬ浪枕。替るは客の心にて夜毎に渡る蜆川。其中町も□□(行李)がり軒に並びし妓女の風。地せめて大江の橋よりもはまる堀江の岸なれや。爰もかしこも山鄙鄙南島の宮一とう頓堀に指し寄る川船も爰には是非に繋がれて。二階座敷の三味の音借りましよ誰さんいなんすか。地其内やいのと言ふもある妓女を弄りてひぞる客。盃なしに歸りてもフシわけは逃れぬ此里の。地習ひなりけり其中に深いは床の私語竹。こなたの座敷は酒機嫌何れも祭文歌はれよと。山衆が錫杖幇間が三味。大盡調子を親ひ位を取つて咳拂ひ。三勝歌思ふかひなき身は川竹の爰に流れを清竹といふ。局格子の憂きふし勤め。何時の頃より彼の文七を。思ひ初めたよナウ染衣の手業勝れし主樣なれど。惡い友には。相見る茶おのれと染まる黄枯茶の江戸茶と聲も薄くして拔入りたりな素海松茶の。三勝長地夜も弱茶も此里へ通ひくるわの其取沙汰を聞くに心もナウ黑茶染。今日は意見のしゆす茶と思ひ。例の格子にすつくりと。春待ち顔の鶯茶。祭文鬼角今宵は青茶ぞとオクリ思ひ樂み居たりしと。ナホス半歌へば其次ぎを所望〳〵といふ聲に。フシ暫し座敷は響動みける。地色その折節勝手よりふたせの女走り出で。詞これ申し皆樣額の小さんが狂氣して地あれ〳〵爰へ參ります。ちやつと來て見さんせといふに客ど

も飛び上り。名代の狂女いさ見んと夕暮かゝる頃しもに。前後を爭ひ飛んで出で爰や彼處の軒蔭に。身を寄せ顔に袖覆ひ今や。遲しと三重へ待ちにけり。

道行

御雜談 西の海あをきが原の。浪間より。太夫現はれ出でし。ナホス氣狂よ〳〵物狂ひよと笑ひけり。詞なに自らを狂人とは。ナウ方々よ笑はゞ笑へ。ちつともそつとも大事オクリないつへ笑うつ フシ様々の怒りに含む。皆に。涙催す春なれや殘せし夫の朝別れ。スエテ亡き面影に誘はれて。思はず爰に迷ひ來る。フシ心ぞうたてかりけらし。我も昔は此里の。花に戯れし身なれども今は引きかへ情ある。殿御と二人添寢して。宵寢の枕雞の鳥諸共に床を出で。長地身をも髪をも姿をも構はで通す身持草世を捨草にあらねども。町家住居は自ら。フシ世間を恥づる習にて。我と我身を懲しむる爰を悟れば勤とぞ。朝な夕なに身をつくり。蘭麝の香りとめ衣の。別れを慕ひ逢ふ迄は又あるまじき樂みと。思ひ思はれ自ら其氣につるゝ淺ましさ。春は物日の遣る瀨なく彼岸櫻の。はで衣裳空色櫻。樺櫻しやんと小褄の一つ前。淺黄櫻の抱帶菅笠の紐緋櫻に。締めて寢し夜の糸櫻一重櫻の情をも。こなし品よく。付けとゞけ。廻れば鬼もなき故に八重櫻とも思ひ詰め。夜々通ふ道すがら。泣いて隱れるフシ大櫻。戀故身をば厭はじと。思ひ詰めたる戀中も遂には散るか薄櫻。薄きは妹背の中川を。渡り比べて今ぞ知る。戀しき夫の行末を敎へて。暮れのかねどとを暫しが。内の暫し間も。忘れもやらで。うか〳〵と逢ひたや見たや。戀しやと。思ふ心や通じけん爰や彼處の木蔭にて。人目を忍び相生の。松の浦風吹き亂れ木の葉散行く道柴の露か涙か諸共に同じ憂身と思ひしも何時の頃にか捨小舟。浪に搖らるゝ姿哉。歌いとし男に思ひを。思ひをさせて。今は主ある妻な。なれば引けどなび。靡かぬ引けと引けど靡かぬナホス思ひ草。切るに切られぬ色の道。夜は夜毎に物思ひ。晝は終日泣き暮し。明し兼ねたる我思ひ。言葉は確かこゝながら。姿見えぬは如何にぞや。如何につらし昔妻。恨みは人をも世をも。思ひ思はじ。我身一つの報ひの罪□□數々の浮名に立ちし戀路の有樣。岩もる水に堰き兼ねて。狂ひ出でにし此姿。見よや〳〵方々と□□はしたなくさ迷ひて笠屋。町へぞ。へ迷ひ行くフシ爰も彼處も。地色繁昌の小オクリ色のへ千草を植ゑ並べ軒にかけたる行燈は。客の目標それ〳〵の手業異なる色商人。地樣樣の思ひ付きとり〴〵なれや其中に衣裳

人形きせくらべさも華やかに飾り立て。裸人形召しませい勤の際の御慰み。切物縫うて抱いて寝て。吾子を設けて世口姦。末を祝うて進ぜられ召せ〳〵召せと賣りければ。地色小さん其儘立寄つて。詞さて珍らしや面白や。ナウ美しや此人形かゝる優しき商ひを。すげなう賣るはすべならず今宵はわしが賣つてやろ。地アヽ慮外ながら賣るきざし其虚退かしやれと突き退くる。亭主ほうど持扱ひ。如何はせんと思ひしがマアどういうて賣る事ぞ。様子を見んと立代りこ蔭に身をぞ隠し居る。地色折節茶屋の歸り足。どれにどれたるうつ人の。我も我もと入り代り賃に色里の色商人。賣物華奢で賣り手よしそれよ是よといふ所へ。悲しきかなや八十郎小さんとは露知らず。何事やらんと立寄り能く〳〵見ればこはいかに。正しくあれは小さんなり兄金五郎に別れつゝ。嫁せしとこそは聞きつるに今又かゝる手業して。世渡ることの不思議さよ詞を掛くるも人心。よしなや仇に捨て置かん。とは思へども今は今。昔の縁其儘に。捨ても置かれず問はんとするに人目を愧ぢ。暫し案じ居たりしがよし〳〵人に打交り。地首尾もあらば尋ねんと編笠傾けこれ女郎。詞此人形のあり次第求め歸ら



金屋金五郎後日鏡形

んさりながら。勤の姿多かりしはそれそれの名こそあらめ。地 殘らず語らば買はんといふ。小さんにつこと打笑ひ。詞 何自らを女郎と頭からしこなする。敵はよつ程地 島なれて我に屈托させんとの。企み由なし賣物に。花を飾れと申すからたとへない名も付けまして。御氣に入るのが勤の身。如何にもわしが烏帽子親オヤ あらまし へ語らん聞き給へ。地 先づ此里の習ひには暫しが内の契をも。千代に準へ別れ路も。スエテ 詞のはづれ匂やかに。近い内にといひ殘す小オクリ 出舟。入舟數數の。フシ 其よしあしの其中に。分けていやなが北時雨。ふるも振られず姿見に。容貌をけほふ心より年の一つも若松や。いざは心の淺くと。身振物腰しやんとしてそして。かうして。意氣地をば。磨かば光る玉屋には。常とて人の憎がらぬ座敷のこなしうらなくも。フシ 通ひ車の。自ら。引かれて廻るさどやには。らんとはねたる面差しにさかめ。立田の薄化粧濃き紅に染羽の矢初も酒相につこりと。櫻重ねの薄茶碗。ずつと差し物通り物。宵のさゞめの フシ 假枕。假初ながら書く誓紙伊勢や二見のみつ潮に。かゝる情の音もせですげなう別れ因幡山。いなの薩摩や八重一重。をらばやをらん床の内。重

ね重ねの下紐をはやとく。田屋と堰きかねて。淺はかなりし身なりとも。思ひ掛けたる一念を。よもや通さで置くべきかと。祈る印の紙屋には。さがとて戀の立姿濡といふ字をたるにして。逢ふ夜嬪しゝ逢はぬ夜つらし。如何で今宵は見えぬぞと硯の海に筆を寄せ。若し平野屋に來てもがな見て來いなどと打附けに。文も心もわくせきと。人目さがなく見ゆるをも構はで通す憂き節の。大竹やにも千代込めて口説の花を咲かせつゝ。又も佐野屋に通ふともさのみな咎め給ひそよ。世はもと忍び緣とてね篠本やに騷ぎねの。淸といふ字を讀みかへて見れば情の最中ぞや。長場小はるが元の私語又の逢ふ瀨を松浦船世渡る業のたみの屋に。來て見よかしの透し文字。フシいせむらやなる神かけて。たとへ拙き戀なりと末をまつほの夕煙。薫るや胸のくら橋や。暗き闇夜に迷ひ出で。嵯峨野の原の地池田やに身を投げ死なば泡沫のフシ鯉やつもつて。淵となる思ひ一つを千代込めて。人目羞かし戀せずば人は情のなからまし。實に富こそは情知り。深いといふが淺くして。淺きが深いものぞかし。うはの空なる客をさへ福の神ぞと夷やの花に戯れ胡蝶に遊び。浮かれ〳〵て來こく〳〵大黑屋。しゆんの過ぎた大黑舞やつ□□(欠字)故なりと北島や。勇み勇めばいつとなく。烏鳴く音に起別かる。京やのくめは手取者。座敷廻りを立派にしむりな口舌もしとやかに。工面ごかしに住吉や。小はる小辨も物しにて居ながら敵の心を察し。戰はずして勝利を得終には文で繋ぐとかや。惣じて妓女の港やに繋ぎ止めたる唄故に。此三原やもわざくれて又の御見を搔き散らす。□□(欠字)のこがれめは勤盛りや間夫盛り厄が崎やの樞にて小しゆん。袖引き目で知らせ詞京井筒屋のくめ樣が知らせてくれといふ客は地よろづきします風俗でよしや。留めなば小夜更けて。傾く迄は語らんと又高津やに染めなして初音草かる□(欠字)のおも戀の重荷に肩かゆる。木やの八重垣結びとめ。かね言の葉の締め括り。綿屋と聞くも懐かしや爰には岸の姫松やひさは浮氣の空となり雨となる由我は又。情に溺れ色故に迷ひさまよひ飛びあるき。戀の淵瀨にすつとん〳〵。とんと平伏し歎きしは哀れなりける姿かな。地色涙泣く〳〵八十郎小さんが傍に立寄つて。詞扨も變りし御姿兄金五郎身まかりし。地後は何處と白浪の寄る邊定めぬ旅役者。暫しの暇なき故に。今は主ある御身と聞く。世間の憚り存じながらの怠り御許し給はれと。しみ〴〵と尋ねけり。地色小さんはそれと見るよりも。なに八十郎樣にてましますか。主に別れて其

後は髪をも下し御跡を。問ひ奉る身なりしがちとした譯もない世帶。つい持ちまして此如く成り行く末の果しなき。思ひは一つ二品に戀はなき人情こそ。今の殿御に止めしを。何の恨みか有明の附添ひ身添ひ此如く我を忘れて泣き明し。狂人なりと人毎に目ひき袖引き笑はせて。嫌御嬉しう ﾌｼ 思されんあれ〳〵。地色あそこへそれ〳〵そこへ爰へ〳〵と言ふ聲もそぞろがましく散る涙。ﾌｼ 哀れといふも愚かなり。ハツト驚き八十郎さて淺ましやいとほしや。物狂はしき其風情見るも中中味氣なや未だ若木の花盛り斯くて果てなば如何にせん。見ぬ先こそは增しならめ如何はせんと行惱む 地色かゝる所へ大次郎小さんが行方氣遣はしく。此處や彼處を尋ねつゝ笠屋町に差しかゝり。見ると等しく抱き止め。コリヤ大次郎が迎ひに來た。心は何とありけるぞ如何に〳〵とありければ小さんは月夜に構はぬ態けら〳〵笑ひくつ〳〵と吹き出す下よりあら涙 スエテ はら〳〵と流しては。詞ナウ懐かしの我夫よ。こなんも人形買ひにかへ。あれか。是と見せければ。地大次郎興をさまし。是たゞ事にてあるまじと。途方を失ひ溜息を ﾌｼ 吐つぐより外はなかりけり。地色八十郎つつと出で。詞卒爾ながら御自分は。曙屋大次郎殿にて候か私事定めて御存じもあらん。小さん殿と許嫁あるに甲斐なき金五郎が弟八十郎と申す者。不思議に今宵對面し嬉しき中にも小さん殿物狂はしき容體見捨て難く思案半ばの折節。地貴殿の御出力を得たり申さば以前所緣。外の樣にも存ぜぬ間。何とぞ蘇生致させたしと。心底殘さず語りしかば。詞大次郎悅びこは忝い一言身に取ての難儀御推量あれかし。此上は力を添へられ彼が狂氣本腹仕るべき相談。千萬頼み奉ると互ひの挨拶こと終り。兩人眉に皺を垂れ暫く案じ居たる所へ。人形屋の主罷り出で。詞最前より樣子を承り。各の御難儀察し奉る。拙者及ばぬ智惠より究竟の事を思ひ附いたり幸ひ阿彌陀池にて和州橋寺四十萬日の回向あり。往昔聖德太子御開闢にて。世に有難き御念佛仰ぎても猶餘りあり。何卒知るべを願ひ御內陣にて一七日御通夜まし〳〵御回向に與り給はゞ。縱へば如何なる惡病生靈死靈は言ふに足らず。此念佛の功力により。遁れぬといふ事なし ﾌｼ 如何があらんと申しける。地人々悅び是佛神の引合せ然らば直に參詣し共々佛力を願はん。いざさらばとて搖り起し。斯くと語れば夢現。小さんは更に性根なく。詞何參らんとは何處〳〵へ。ﾃﾞﾄﾞﾘお伊勢參りは皆籠拔よわしも拔けたよ笠着て拔けた。拔けてござらば長谷迄ござれと。囃し立てね

ど我は行く水の流れの堀江なる阿彌陀池へと〳〵急がるゝ。寶も永き。地色世々の末げに日の本の繁榮は。戸ささぬ國の中津川浪速の里に流れ寄る。水の蘆邊をおと□□江を堀り抜きて地を平し町々小路を割付けて。民屋甍を立並べ南堀江の朝別れ吉野小路の黄昏時通りの呼子鳥西は西方極樂の。臺を結ぶ法の聲御池に光る常燈明。絶えず輝く玉の宮殿□□橋。本堂には信濃の國善光寺を爰に移し。晝夜稱名忘らず世に有難き御寺とかや。時なるかな五月廿八日は和州橘寺の開帳四十萬日の回向。阿彌陀池にて始れば。老若男女の別ち無く。我も〳〵と參詣し席を爭ふばかりなり。折節なれや世の中の苦は色變る飛鳥川。思ひの淵に沈みたる小さんを連れて大次郎。八十郎も力草引くに引かれぬ緣の綱共に手を取り道草の露の命を止めんは。今此時と行く足の亂れ心も白ら。地性根泣く〳〵法の庭阿彌陀池にぞ着きにけり。とある木蔭に小さんを忍ばせ。八十郎が膝枕面影隻れ朝日影。しぼめる姿哀れさよ大次郎はこゝかしこ。知るべもあらば尋ねんと本堂の軒陰を彼方此方とさ迷ふ所に。五十路餘りの老僧同宿數多連れ給ひ。方丈より出で給ふ是幸ひと畏り。詞卒爾ながら私は。當地に於て曙屋大次郎と申す者。召し連れし女此頃狂氣仕り。心身の苦しめ本心を失ひ。やゝともすれば馳け出で一家の騒動止む事なし。承れば當寺にて。聖德太子四十萬日の回向御座候由。逢ひ難き開帳に逢ひ奉る嬉しさ。あはれ念佛の功力を以て彼が狂氣本腹仕るべき御示しにも預らば如何ばかりの御恩ならめと涙を流し申しける。地色老僧默然と打頷き。詞扨々笑止各の難儀察したり。折よくかかる節の參詣佛の御內緣に叶ひ奉るかたがた。地如何で粗略に存ずべき。何が扨出家の役。念佛の德を以て生靈死靈を現はし。本心となすべき間信心怠る事勿れ。それ〳〵女中を俱し給へと老僧先に立ち給へば二人は小さんを介抱し。御寺にこそは入りにけり。聖德太子の善の綱小さんに持たせ數珠掛けさせ。右手の方に居直らせ二人に向つてあひ十念世にも殊勝に見えにけり。地其後高座に上らせ給ひ一心歸命頂禮し。念佛の行者廣大無邊の不思議をば語り聞かさせ給ひしはオクリ有難へかりける次第也。地抑も和州高市郡佛頭山橘寺と申すは。我日の本の中にして人の世既に三十二代。用明天皇の王城(本ノマヽ)聖德太子御建立の御寺なり。或る時帝の御寢夢に。三輪大明神告げ給はく。常世の國の香具果は。人の氣を助け候はゞ病を治するとかや。急ぎ彼の地に勅使を立て求めよとの寢夢に任せ。田

道間守。承り。常世の國に行く年の。十歳の春を送りつゝ。是を求めて立歸り。香具を捧げ奉る。天皇叡感斜ならず。則ち此地に植ゑさせ給へば花咲き實り榮えしより。橘寺とは申すとかや。地太子三十五歳の時。淸凉殿にて勝鬘經を說き給ふ。時に虛空に音樂聞え花降り異香四方に薰じ。當山の頂に。千佛面貌拜まれさせ給ひ。衆生成佛の證明を現はし給ふ。天皇淺からず思し召し東西南北八丁に七堂伽藍を建立し。千佛頭山とも。又は我朝の靈鷲山とも申すなり。卿相雲客を始め下萬民に至る迄。念佛修行の外他事なし。其後太子信濃國善光寺。閻浮提金の三尊のうつし御父帝の御菩提。又は末世利益のため此御寺の境內に。僅の道場を構へ往生院と名附け。自ら開白ましまし。不斷念佛怠らず本朝念佛の始め是なり。然るに回向といひなし。此度開帳あるにより。四十萬日の回向をなし奉りぬ。誠に佛法最所。念佛の奇瑞。數ふるに暇あらず。並びに聖德太子十六歳の尊像は。沈檀香にて自ら造らせ給ふ。御丈は五尺七寸なり。三十五歳の尊容は其丈二尺二歳の御影は一尺八寸是皆太子の御作なり。かゝる時節に阿彌陀池燈明の光猶。明らけき誠の心に映り行く縱へ如何なる恨みあるとも念佛の功力に惹かれ成佛の身となるべしそれ西方十萬億土。遠く生るといひながら。ツシ爰も己身の彌陀の國。日々夜々の法の庭。實に撮取不捨の誓ひには誰此土にツシ止まらん。地極樂淨土に至りぬれば輪廻の故郷隔たりぬ。歡喜の心幾許ぞや。所は浮提命は無量壽佛と唱ふ念々さうそ□する人は。念々毎に往生す南無といつば則ち歸命。阿彌陀といつば其理面々〈ネノマ〉不同八萬四千。以滅無量過業因。利劍卽是彌陀號一聲稱念罪皆除。南無阿彌陀佛と唱へ給ふぞ三唱へ有難き不思議やな金五郎が俤後にすつくと立ち。地あら恐しの讀誦の聲。其方に附添ひ諸共に無間地獄の苦みを。受けなば受けんと思ひの外なる御法の庭。實に有難き佛道の示しに怒れる角も折れ。却つて佛果を受くる事。世に例なき御回向に逢ひ奉る故ぞかし。思へば〳〵嬉しやな暇申すぞ大次郎。小さんが事を賴むぞと言ふ聲ばかり忽ちに。白色の玉虛空に上り阿彌陀池に飛び去りしは不思議なりける三唱へ佛力なり小さんは夢の覺めたる心地大次郎に抱き付き是は如何にといふ聲もツシ泣くより外の事はなし。大次郎悅び佛力といひ不思議といひ。心の曇り晴渡る急ぎ館に歸りつゝ追善心に任さるべしと。扨御僧に打向ひ。誠に故なき我々にかゝる善根なし下され。御恩如何で報じ申さん。別して妙なる念佛の

智力に依り。再び本心となり候事偏に太子の御加護と存じ。感涙袖を浸し候御寛の通りに候へば。先づ〳〵御暇申すなり重ねて御禮申さんと。懇に一禮し御池に向つて合掌し。衆々十罪五逆障自他平等利益。卽心成佛南無阿彌陀佛〳〵。と唱ふる聲の下よりも。金五郎燈明堂にありありと。あら尊とや有難や。彼方へ此後又と來るまじ六字の聲を聞く時は。熱き心を和げ忍辱慈悲の姿にて。菩薩も爰に來迎し。上品蓮臺に至りつゝ成佛得脫の。身と成り行くぞ有難き〳〵。

錦小路通油小路西へ入町

正本屋　山本六兵衛　新板